

くなった後、皇統を継ぐために忍齒王の遺児、兄、意祁（おけ）王、弟、袁祁（をけ）王は亡命先の針間国から呼び戻されて、弟、袁祁（をけ）王が皇位を継ぎ、顕宗天皇となった。

顕宗記に、この天皇、今は亡き父王、市辺の（忍齒の）王の遺骸を捜そうとした時、かつて亡骸をもらいうけて、齒を抜いてみたことのある賤しい老嫗があらわれて、次のように語らせたことになっている。

「王子の御骨を埋みしは、専ら吾よく知れり。
またその御齒をもちて知るべし。御齒は三枝（ミツマタ）の如き押齒にましき」

賤老嫗の「賤」の由来・展望を説文によって調べると、

奴は、奴婢皆古辜人也

婢は、女之卑者也

卑は、賤也

辜は、犯法也。法を犯した罪人。

奴の原意は、女を右手で捉え、レイプする底意があった。また、辜は、古の戦争犯罪人。

賤は、賈少也。売りに出しても値が安い。賈は、賈市也一曰坐売售也。露店売り。售は、売去手也詩曰賈用不售。売れない。

む す び

1. 古代インドの種姓制度には、家畜扱いの賤民・奴隷も含まれていたと考えると、大地原本スシュルタ本集の家畜解釈は正解に近い。

2. 英訳の孫引き、伊東本ススルタ大医典の「死動物」は誤解を招く恐れが多分にある。

3. と同時に、仏教伝来以前の伝承を712年に筆録した古事記は、その時すでに、伝承インド医学の教養を身につけた異種族庶民が久多綿（韓語）に渡来していたことを物語る。

4. それは、太安万侶の学殖が稗田阿礼の語りを修飾したことだったのか。

5. なお、一抹の不明・不安が残っている。

補遺 久多に志古（アイヌ語）渚神社がある。

14) 『樗雑集』 牙齒門の研究

Research on the Dental Diseases in
“Chozatsu Syu” (樗雑集)

鶴見大学歯学部 ○戸出 一郎

佐藤 恭道

別部 智司

雨宮 義弘

Ichiro Tode, Yasumichi Sato, Satoshi Beppu
and Yoshihiro Amemiya, Tsurumi University, School of Dental Medicine

『樗雑集』は室町時代後期に撰述されたと思われる医学全書である。本書の中で歯牙疾患は第18冊の中に『牙齒門』として一括されている。

牙齒門では、冒頭に李東垣の病理論が述べられているが、これは明・方賢等撰『奇效良方』からの引用である。『奇效良方』は成化7年（1471年）に刊行されている。この病理論は、南宋時代の名医李東垣が『蘭室秘蔵』に載せていたものを方賢等が引用したのである。

東垣の病理論は、はじめに『靈樞』経脈篇による経絡の走行、上下歯肉の経絡分布、寒熱による病症を述べ、そのうえ『諸病源候論』の医説をも加味して、歯牙並びに歯周組織の疾患の病理・病症を巧みに説明している。この医説は『諸病源候論』よりも格段の進歩を示していて、これが後代にわたり永く引用されつづけたのは故あることである。

処方全部で76例あるが、欄外の所々に丹・丹溪・序例と記され、また文中には東垣・奇效と記されているものがある。これが出典を示していることは言うまでもない。ちなみに丹は朱丹溪、序例は『証類本草』の序例である。

薬方のうち第7番目から22番目までは、内容、順序とも元・劉純撰『玉機微義』と同じで、その引用と思われる。ただし『玉機微義』には処方の引用文献が明記されているが『樗雑集』では省略されている。また生薬名は簡略化され量の単位は和名となっている。また薬物の修治や適用法が省略されていることが多い。

ここで注目されるのは、『玉機微義』にはしばしば薬方の帰経、すなわち、その薬方がどの経絡に作用するかが記されているが、『樗雑集』は意識的

にこれを引用明記していることである。牙齒門のみならず全体において、陰陽・虚実・寒熱ならびに経絡に関する医説が多く、内経医学に傾倒した金・元・明初時代の医学を継承していることがうかがえる。牙齒門では7～22番の16方中13方に帰経が明記されていた。

牙齒門の処方76例中『玉機微義』からの引用が18例、『奇效良方』からの引用が13例ある。その他の医書で本書と同一処方を持つ医書は16種に及ぶ。日本の医書では『医心方』『頓医抄』の両書からは引用されていない。しかし曲直瀬道三の『啓迪集』は内容が似ているので興味深く、これは今後の研究課題としたい。

口中書では、『口科叢書』の中の『典藥丹三位親康秘伝』に牙齒門なる一門があり、その部分だけが漢文で記述され、かつ引用文献の略号が付されている。略号は林・因・傳・玉・恵とあり、末尾に「時干天正第五丙子孟春日書焉」と記されている。天正五年（1576年）は『樗雜集』が撰述された時代に近いと思われる、その内容には『樗雜集』と一致する医説や処方がすくぶる多い。

『樗雜集』が『啓迪集』や『典藥丹三位親康秘伝』とどのような係わりがあるのか興味深い問題である。

更に『樗雜集』を『医心方』と比較すれば、『医心方』が唐代の『千金方』を模した（しかし単方を主とする）方書であり、その医説は『諸病源候論』の引用であったのに比べ、『樗雜集』は内経を踏まえた金元医学を論拠としており、その視点の深さについては比較にならないものを持っている。『樗雜集』は我が国医学界において、唐代方書の模倣から抜け出して、やがて後世派医学を確立するその過渡期において何か大きな役割を担っていたのではないかと思われる。

15) 「太平聖恵方」における口腔乾燥症治療について

Treatment of Xerostomia in “Tai Ping Sheng Hui Fang” (太平聖恵方)

鶴見大学歯学部 ○佐藤 恭道
別部 智司
戸出 一郎
雨宮 義弘

Yasumichi Sato, Satoshi Beppu, Ichiro Tode and Yoshihiro Amemiya, Tsurumi University, School of Dental Medicine

われわれは本学会において「諸病源候論」を初め、「太平聖恵方」や「聖濟総録」など中国古代医学全書における口腔軟組織疾患や歯牙疾患などについて報告してきた。

古代の病名を現代医学的に説明するのは難しい。しかし口腔乾燥症はその症状が比較的分かりやすく、現代においても金匱要略（白虎加人参湯、麦門冬湯）や万病回春（滋陰降火湯）などによって処置されることが多い。そこで今回われわれは宋代初期の医書「太平聖恵方」の第36巻、口舌唇耳病、治口舌乾燥諸方について検索したので報告する。

「太平聖恵方」は西暦987年～992年に王懷隱らによって編纂された病理・病因・病態・治方に関する医書である。全100巻、1670門、16834方に分類されており、各門の冒頭には隋・巢元方が編纂した「諸病源候論」を基にした病理論があり、各方ごとに症候と処方が記されている。

第36巻には14門の耳疾患および12門の口腔軟組織疾患が記載されている。口腔乾燥症は治口舌乾燥諸方として記載されている。冒頭の病理論は「心経は舌に、脾経は口に通じる。よってこれらが虚して熱が入ると、唾液が枯渇し口舌が乾燥するのである。また肺経が虚しているものは唾液が出ないため喉が乾燥して呼吸がしづらい。胃経が虚しているものは口唇が乾燥し、胆経が実しているものは喉が乾く。」とあり「諸病源候論」の口舌乾焦候と同様である。諸方は又方を含め9方記載されている。唐代の「千金方」や「外台秘要方」と同一の処方では認められない。構成生薬は甘草、人参、烏梅肉、麦門冬など基本的には類似のもの